

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 18

—平成16年度—

2005. 3

香芝市教育委員会

序 文

香芝市は奈良県の北西部、古代から穴虫越えや関屋越えが通じる大和と河内を結ぶ交通の要衝、そして、『万葉集』にもうたわれた二上山の麓に位置します。この二上山からはサヌカイトや凝灰岩、ざくろ石などが産出し、これらの石はそれぞれの時代において盛んに利用され文化の発展に寄与しました。

サヌカイトは2万年前の旧石器時代からおもに石器の素材として、凝灰岩は古墳時代以降に石棺や石桿、そして、寺院や宮殿の基壇、さらには石仏や石塔などにも使われました。また、ざくろ石は明治以降に研磨材などに使われ、近代産業の発達に大きく貢献しました。

さて、今回報告する尼寺廃寺は、平成3年度からの範囲確認調査調査で南と北の2つに分かれる寺院跡であったことがわかっておりまます。

北廃寺は東向きの法隆寺式伽藍配置で、平成7年度の調査では塔跡から現存するものとしては日本最大の心礎とその心柱の柱座から耳環や水晶玉などがみつかりました。そして、「聖徳太子建立の葛城尼寺か?」として一躍全国的にその名が知られるようになりました。その後、平成12年度に中門の位置が確認されたことによって、平成14年3月19日付けで国史跡に指定されました。

南遺跡は平成13年度から本格的に範囲確認調査を始めました。その結果、平成13年度には法隆寺若草伽藍の創建瓦と同じ瓦が出土し、平成15年度には般若院境内で塔跡と金堂跡と考えられる基壇を検出するなど大きな成果がありました。

本年度は伽藍が検出された般若院境内の周辺において調査しました。調査を実施するにあたり、土地所有者の堀川雅弘氏、堀川益子氏、中山義崇氏のご理解とご協力、さらに、尼寺自治会長の石峯義隆氏には多大なご配慮を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

平成17年3月

香芝市教育委員会

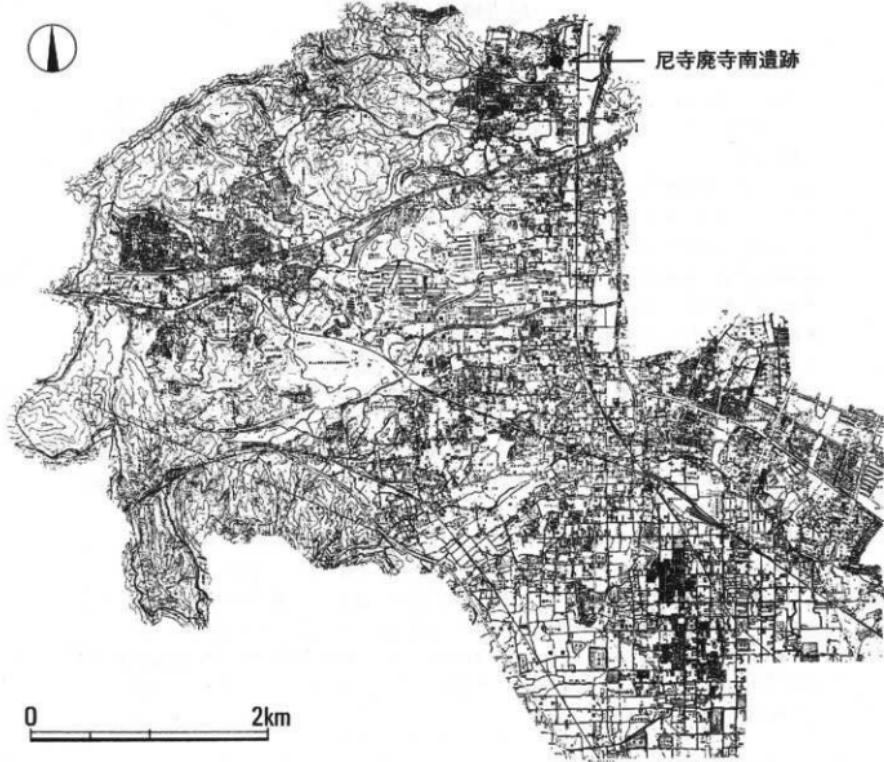
教育長 山田勝治

例　　言

1. 本書は、平成16年度において香芝市教育委員会が国庫・県費補助事業（事業名：市内遺跡発掘調査）として実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は香芝市が事業主体となり、香芝市教育委員会事務局生涯学習課が実施した。
3. 発掘調査に関する遺構や遺物の写真・図面等の調査記録、および出土遺物は香芝市二上山博物館（奈良県香芝市藤山1丁目17番17号）で保管している。
4. 本書に掲載した実測図の水準は海拔高である。
5. 発掘調査を実施するにあたり、土地所有者の堀川雅弘氏、堀川益子氏、中山義崇氏、さらには、尼寺地区自治会長の石峯義隆氏には地元の方々への周知をはじめとする種々のご協力、ご配慮を賜りました。ここに記して深く感謝申し上げます。

目　　次

調査位置図	1
尼寺庵寺南遺跡	2
I はじめ	2
II 遺跡の環境と既往の調査	2
III 第20次調査	4
1 調査の概要と検出遺構	4
(1) Aトレンチ	4
(2) Bトレンチ	6
2 まとめ	6
IV 第21次調査	6
1 調査の概要と検出遺構	6
(1) A・Bトレンチ	6
(2) Cトレンチ	7
(3) Dトレンチ	7
2 まとめ	7
V まとめ	8



第1図 平成16年度国庫補助事業に伴う発掘調査位置図 (S = 1 / 500)

平成16年度国庫・県費補助事業に伴う調査一覧

遺跡名	調査次数	調査地番	調査期間	調査面積
尼寺廃寺南遺跡	第20次	尼寺2丁目177-1, -2, 180-1, -2, -3	平成16年8月18日 ～9月9日	62.25m ²
尼寺廃寺南遺跡	第21次	尼寺2丁目296番1	平成16年9月21日 ～10月10日	55m ²

尼寺廃寺南遺跡

I はじめに

香芝市では近年、大阪のベッドタウンとして開発が進み、それにつれて埋蔵文化財の発掘届出件数も急増している。市内には旧石器時代からの重要な遺跡が数多くあるが、小規模な開発に伴う発掘調査がほとんどで、遺跡の範囲や性格などを把握するには至っておらず、範囲確認調査が追いつかないまま開発が進んでいるのが現状である。

そこで、遺跡の範囲等を把握し、今後の開発行為に対応するためのデータ収集と自己用専用住宅の建築に対応するため、昭和56年度以降、毎年国庫補助事業を継続的に実施している。昭和56年度から平成2年度までは、二上山北麓にひろがる旧石器時代を中心とする遺跡群の発掘調査を実施した。続いて、平成3年度から平成9年度にかけては、急速に開発が迫ってきた尼寺廃寺の範囲確認調査を行い、北廃寺が7世紀後半に創建された東向きの法隆寺式伽藍配置であったこと、さらに、寺域もほぼ解明されたことにより保存に向けての資料が蓄積された。そして、平成11・12年度は平野2号墳を調査し、これまで不明であった埴丘南斜面に開口する横穴式石室を検出した。また、平成12年度には範囲確認調査がほぼ終了した尼寺廃寺（北廃寺）の中門推定地において自己用専用住宅の建設が計画され、その事前発掘調査によって推定通りの位置で中門基壇が検出された。これにより、ようやく北廃寺の伽藍配置が確定したことから平成13年7月に史跡指定申請書を提出し、平成14年3月19日に国史跡として告示された。

続いて、平成13年度からは尼寺廃寺南遺跡において本格的な範囲確認調査を開始し、同年には斑鳩寺の創建瓦と同范の軒平瓦などが出土し、北廃寺より創建がさかのぼることが判明した。そして、平成14・15年度には遺跡の中心である般若院境内を調査し、塔跡と金堂跡と考えられる基壇を検出し、周辺の地形等から南向きの法隆寺式伽藍配置であったことを確認した。しかし、寺域の確認まではいたっていないことから、今年度においても般若院周辺において南遺跡の範囲確認調査を実施した。なお、南遺跡においては調査可能な空き地がないことから、今年度が最終の範囲確認調査となる。

II 遺跡の環境と既往の調査

尼寺廃寺は奈良県香芝市尼寺の北部、王寺町との境に所在する飛鳥時代から白鳳時代に創建された寺院跡である。尼寺廃寺の南を流れる尼寺川を隔てた丘陵の北斜面には5基からなる平野窯跡群があり、6世紀後半～7世紀初頭に操業したと考えられる須恵器窯と7世紀後半に操業したと考えられる瓦窯が確認されている。そして、瓦窯がある丘陵の南斜面には7世紀初頭から7世紀末にかけて造営されたと考えられる平野古墳群がある。また、尼寺廃寺の北約1.7kmには7世紀前半に創建されたと考えられる片岡王寺（放光寺）がある。この片岡王寺は「放光寺古今縦起」によれば、敏達天皇の第三皇女の片岡姫が営んだ片岡宮を寺に改めて片岡寺と称したことが始まる。また、尼寺廃寺の南東約3kmには敏達天皇の皇子である押坂彦人大兄皇子の墓とされる牧野古墳が所在する。この牧野古墳の西側の谷を北流する滝川を北へ約2.2km下った東側丘陵裾には下牧瓦窯跡があり、さらにそこから北へ約1.1km下った丘陵東裾に位置する薬井窯ノ北遺跡において、平成15年度の調査で窯跡の灰原が検出され、長屋王邸跡から出土した瓦と同范の軒平瓦が

出土している。

さて、尼寺廃寺は古くから尼寺の集落内で古代の瓦が多数出土し、現在もいたるところで散見できることから寺院跡の存在が考えられてきた。しかし、瓦が南北約200m隔てて存在する礎石が残る基壇を中心に分布し、また、南と北のほぼ中央付近に谷が存在することなどから、南北2つに分かれる寺院跡と考えられてきた。

北遺跡には一辺約10mほどの方形墳状の高まりがあり、礎石と考えられる巨石の一部が露出していた。この土壇を中心に多数の瓦が分布しており、何らかの基壇であった可能性を考えられていた。南遺跡は役行者をまつる薬師堂に礎石がいくつか残っていることから、堂宇の基壇と考えられ、地元でドヤマ（堂山）とよばれている。その西約50mにある般若院の境内においては軒瓦を含む大量の瓦が散乱している状態である。しかし、ドヤマと般若院の位置関係から一つの伽藍を想定するには無理があり、その関係解明も大きな課題であった。また、般若院の西約60mにある厨神社には登竜の断面が露出している。

そこで、実態不明な寺院跡を解明するため、平成3年度から9年度までおもに国庫補助事業による範囲確認調査を継続して実施した。この間、平成7年度に実施した北廃寺塔跡の調査において、現存するものとしては日本最大の心礎が見つかり、その柱座から耳環12点や水晶玉4点などの舍利荘嚴具が出土し、さらに、塔基壇構築法がはっきりするなど多大な成果があった。この塔跡の調査以降、尼寺廃寺の重要性が指摘されるようになり、保存に向けての範囲確認調査が急がれることになった。そして、平成9年度にはこれまで未確認であった東面回廊と寺域の南限を画すと考えられる築地状の遺構を検出し、東限についても地業を検出したことからほぼ寺域と東向きの法隆寺式伽藍配置であったことが確認された。しかし、中門が未確認であることなどの理由から保存策が進まなかったため、平成12年度には中門推定地で個人住宅の建替えが計画された。そして、発掘調査を実施したところ、ほぼ推定通りの位置で中門が検出され、東向きの法隆寺式伽藍配置が確定した。

一方、南遺跡は平成14年度にドヤマ（堂山）を調査し、焼失した痕跡を検出している。さらに、平成14・15年度に般若院境内を調査し、東西方向にならぶ2つの基壇を検出した。基壇の規模と周辺の地形等から南向きの法隆寺式伽藍配置であった可能性が高くなった。しかし、この般若院周辺においては個人住宅建築等に伴う小規模な調査や範囲確認調査も実施したが、伽藍に関係する遺構は検出されていない。また、平成13年度の調査では斑鳩寺の創建瓦の1つである斑鳩寺213Bや範傷の少ない坂田寺式軒丸瓦が出土するなど、北廃寺より創建がさかのぼる可能性のある



第2図 調査位置図 *数字は調査次数を示す
A 薬師堂 B 般若院 C 尼寺廃

遺物が出土している。しかし、地割から回廊の存在が推定される位置を調査したにもかかわらず、出土した瓦の量は調査面積に対して少ないことから、回廊等の存在が疑問視される結果となった。なお、伽藍推定地の東から南東部分においては、民間の開発事業に伴って大規模な調査が行われ、多数の掘立柱建物跡や井戸などが検出されている。これらの遺構は南遺跡の寺院を造営した集団、あるいは寺院に関連する集団の建物群等の可能性が想定されており、北は寺院の空間、南は生活空間であった可能性を想定した。

III 第20次調査

1 調査の概要と検出遺構

今回の調査は個人住宅建築に伴い平成16年8月3日付けで埋蔵文化財発掘届出書が提出されたことに始まる。申請地は2つの基壇を検出した般若院から道を隔てた北西に位置し、塔・金堂を囲む施設と寺域の北西部が検出される可能性が考えられた。なお、平成13年度に東側隣接地（般若院の北側）を調査したが、近世に削平され伽藍に関係する遺構は検出できなかった。しかし、今回の申請地は周囲より一段高いことから遺構が残っている可能性が考えられた。現地調査は8月18日から9月9日まで実施し、実働は15日であった。

(1) Aトレンチ

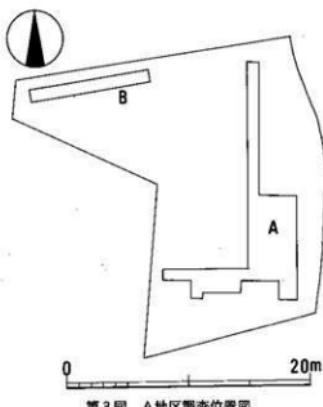
まず、塔・金堂を囲む施設を確認するため、申請地の南東隅部分に東西4m、南北7mのトレンチを設定し人力で掘削した。

遺物はおもに第4層の下層から出土したが、この層は戦後に整地された第1層から第3層までの堆積で堅く締まっており、陶磁器片やナイロンの紐も含まれていることから近代の堆積であることは明確である。そして、その直下で地山が検出され、この面を精査したが中世から近世に掘削されたと考えられる素掘小溝が数条と、底から近代の陶磁器が出土した溝が検出されたのみであった。素掘小溝は深さ数cmしか残っておらず、この面から近世の溝が掘り込まれていることから、この時期にかなり削平されたと考えられる。また、第3層の明黄褐色土は明らかに西側の丘陵斜面の土であることから、戦後に丘陵を削って整地されたと考えられる。

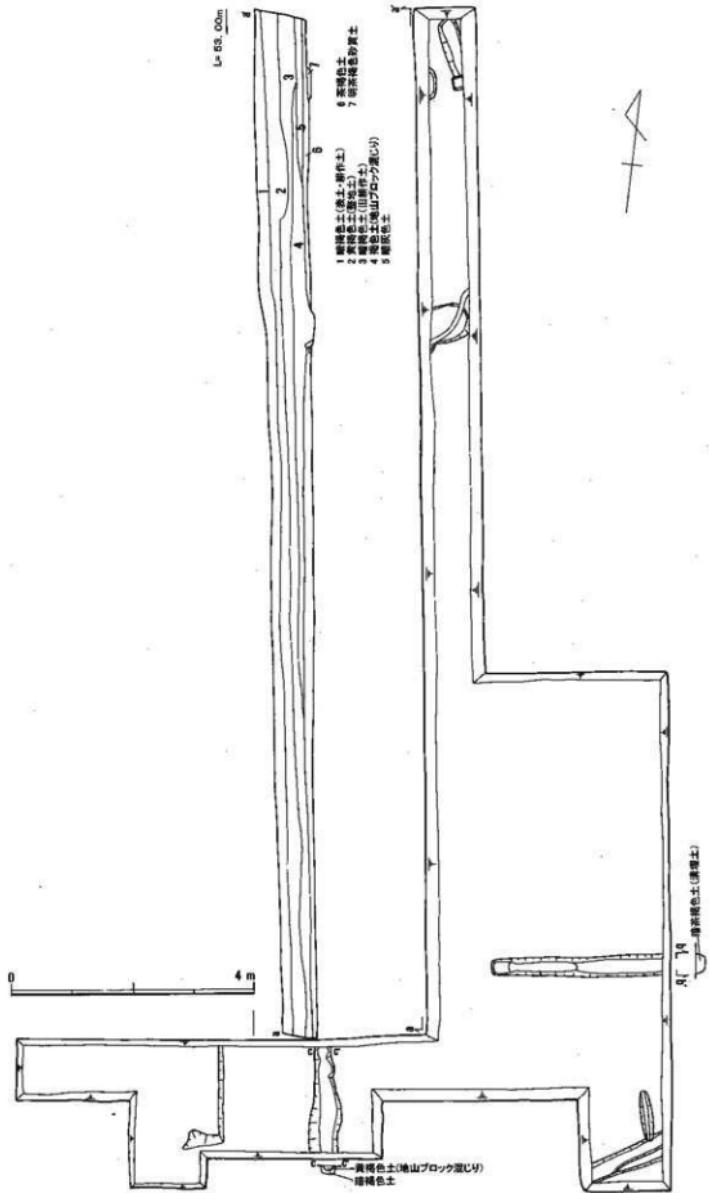
次に、東西方向の築地等を確認するため、トレンチ北西部から北へ幅1m、南北11m拡張（北拡張区）した。しかし、このトレンチにおいても同様の堆積で、遺構も北側で直径約50cm、深さ約10cmの浅い土坑と、幅約50cmの溝などが検出されたのみであった。

次に、トレンチ南東部で南へ1.5m四方拡張したが、ここにおいても素掘小溝が検出されたのみであった。

最後に、トレンチ南西部で西へ幅1m、東西7m拡張（西拡張区）した。ここでは地山面において約10cmの段差が南北方向に、そして、溝も同じ方向で検出され、築地や柱穴など寺域を画する施設の可能性が考えられたことから、トレンチを一部南へ拡張したが確証は得られなかった。



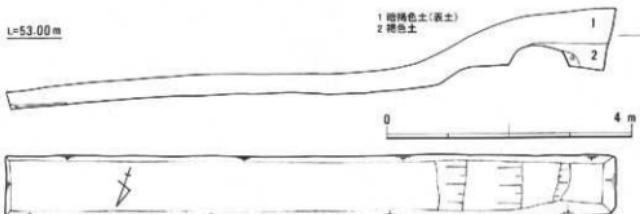
第3図 A地区調査位置図



第4図 Aトレーナ実測図

(2) B トレンチ

調査地の北西部、丘陵頂部から斜面にかけて東西10m、南北1mのトレンチを設定して掘削した。しかし、表土直下で地山が検出され遺構・遺物は皆無であった。



第5図 B トレンチ実測図

2まとめ

今回の調査では伽藍に関係する遺構は検出されなかった。般若院境内の調査では地形的に南へ傾斜していることから、この南側の低い部分に地山を削って整地した状況が確認された。おそらく般若院の北側、および今回の調査地にのびる丘陵先端を削平して客土した可能性が高いと考えられる。このことについては、今回の調査地は西からのびる丘陵の先端部に位置し、戦後、整地に伴って削られた部分もあるが、急斜面となっていることから、おそらく創建時に寺域の南側への客土と寺域北側の整地のため大規模に削られ、整地後に寺域を画する施設が造営された可能性が高いと考えられる。しかし、地山直上で陶磁器片やナイロンの紐が出土したことから、近代において地表面まで改変されたと考えられる。

なお、平成13年度において般若院北側隣接地を調査したが、ここでも近世以降の改変を受けていた。南遺跡は般若院内で塔・金堂と考えられる基壇が検出されたが、周囲に家屋が立ち並んでいることから寺域については今回の調査地しか空き地ではなく、今後は建替え等にともなう地道な調査が必要となろう。また、地元でドヤマ（堂山）とよばれる礎石が残る基壇と伽藍との関係についても不明である。

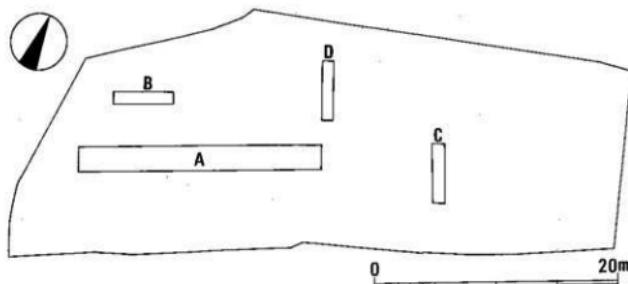
IV 第21次調査

1 調査の概要と検出遺構

第21次調査は範囲確認調査として実施した。平成15年度の調査で塔・金堂と考えられる基壇を検出した般若院から市道をはさんだ南東部にあたり、調査地の西端がほぼ金堂と考えられる基壇の真南に位置する。このことから、寺院の南を画する何らかの遺構が検出される可能性があった。

(1) A・B トレンチ

まず、調査地の土層と遺構の状況を確認するため、調査地の西側で東西20m、南北2mのトレンチを設定し（Aトレンチ）、次に、Aトレンチの北側で東西5m、南北1mのトレンチを設定し（Bトレンチ）、いずれも人力で掘削した。遺物は第3層と第4層、および第5層の地山直上で瓦片が数点出土したが、遺構は皆無であった。



第6図 21次調査トレンチ配置図

なお、Aトレンチの層序は以下の通りである。

- 第1層 暗褐色土（耕作土、層厚約30cm）
- 第2層 灰茶褐色土（底土、層厚約10cm）
- 第3層 橙褐色土（整地土、層厚約5cm）
- 第4層 灰褐色土（整地土、層厚約10cm）
- 第5層 地山

(2) Cトレンチ

Aトレンチから東へ9mの位置で東西1m、南北5mのトレンチを設定し人力で掘削した。遺物は第3層と第4層、および第5層の地山直上で瓦片が数点出土したが、遺構は皆無であった。

(3) Dトレンチ

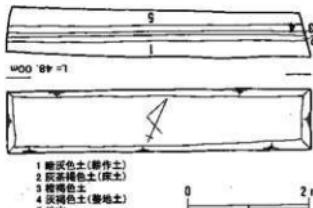
Aトレンチの東端から北側へ2mの位置で東西1m、南北5mのトレンチを設定し人力で掘削した。遺物はおもに第7層の地山直上で数点出土したが、遺構は皆無であった。

2まとめ

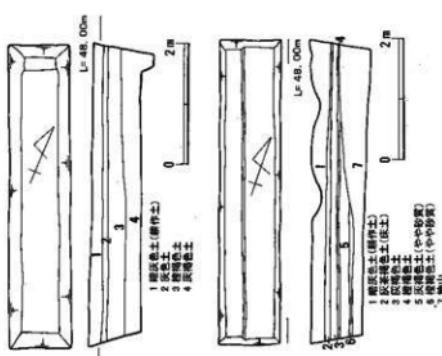
今回の調査地は基壇を検出した般若院から約2mの比高差がある。

しかし、南遺跡の創建にかかるる

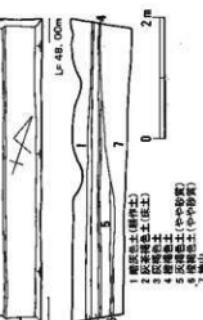
何らかの遺構等が検出される可能性があったことから調査した。しかし、各トレンチからは耕作のために客土したと考えられる整地土が水平に堆積していたのみで、遺物も整地土と地山直上からわずかに出土しただけであり遺構は皆無であった。このことから、今回の調査地は寺域の外であった可能性が高く、般若院の南側を東西方向に走る現在の市道の中で寺域の南限がおさまると



第7図 Bトレンチ実測図



第8図 Cトレンチ実測図



第9図 Dトレンチ実測図

考えられる。今後、市道の改修工事の際に調査する必要があるだろう。

V まとめ

平成13年度から今年度までの4年間にわたる尼寺廃寺南遺跡の範囲確認調査は終了した。この間、遺跡の中心と考えられてきた般若院境内において東西方向にならぶ2つの基壇を検出し、その規模から西側が塔、東側が金堂と推定され、周辺の地形等から南向きの法隆寺式伽藍配置であった可能性が高い。しかし、講堂の存在が予想される北側や周辺地域を調査したが、近世の整地等によって地山面まで搅乱されていたことから伽藍に関係する遺構は検出されず、寺域等の解明まではいたらなかった。また、周辺地域から出土した瓦の量は、他の瓦葺の堂宇や築地の存在を想定するには少なすぎである。近世までの水田耕作に伴う整地や搅乱によって、堆積していた瓦が移動したことも考えられるが、おそらく簡易な施設で寺域を画していた可能性が高いと考えられる。また、地元でドヤマと呼ばれている礎石が残る基壇と般若院で検出された伽藍との関係も不明である。今後、ドヤマの周囲で調査する機会があれば、何らかの手がかりが得られるであろう。ただ、ドヤマの東側の調査において、近世の土坑からではあるが斑鳩寺と同范の軒平瓦（斑鳩寺213B）が出土している。しかし、基壇が検出された般若院内からは出土していない。このことから、ドヤマに斑鳩寺213Bが葺かれていた堂宇があった可能性が考えられる。斑鳩寺213Bの年代は、斑鳩寺の造営においては山背大兄王の時期にある。山背大兄王の母は刀自古郎女で、上宮聖徳法王帝説では聖徳太子と刀自古郎女の子として山背大兄王のほか財王、日置王、片岡女王の四人が記されている。その名前からこの地に居住していたと推測される片岡女王が堂宇を建立するにあたり、兄の山背大兄王から瓦を提供を受けた可能性が考えられる。このことについても今後、ドヤマ周辺の調査で斑鳩寺213Bがまとまって出土すれば、その可能性が考えられよう。

以上、今後の課題を残して範囲確認調査を終了することになったが、南遺跡において伽藍の存在を確認したことや北廃寺より先に造営が開始されたことなど、多大な成果をあげることができた。今後は個人住宅の建替え等による地道な調査を積み重ね、少しずつ課題を解明していかなければならない。

参考文献

- 香芝市教育委員会編 2002 『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報15』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 2003 『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報16』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 2004 『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報17』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 2003 『尼寺廃寺I』香芝市教育委員会



調査前（南から）



トレンチ全景（南から）



トレンチ近景（南から）



北拡張区全景（南から）



北拡張区近景（北から）



西拡張区全景（東から）



西拡張区近景（南西から）



調査前（東から）



トレンチ全景（東から）



トレンチ全景（西から）



トレンチ西側土層（北東から）



調査後（南から）



調査後（北東から）



調査後（東から）



調査前（南西から）



調査前（北東から）



Aトレンチ全景（西から）



Aトレンチ南壁土層（北東から）



Bトレンチ全景（北西から）



Bトレンチ南壁土層（北西から）



C トレンチ全景（北西から）



C トレンチ全景（南から）



D トレンチ全景（北から）



Dトレンチ西壁土層（北東から）



調査後（南西から）



調査後（北東から）

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅううろくねんどかしばしまいぞうぶんかざいははくつちょうさがいほう ジゅうはち						
書名	平成16年度香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 18						
副書名							
巻次							
シリーズ名	香芝市埋蔵文化財発掘調査概報						
シリーズ番号	18						
編著者名	山下 隆次						
編集機関	香芝市教育委員会						
所在地	〒639-0243 奈良県香芝市木町1397番地 TEL 0745-76-2001						
発行年月日	西暦2005(平成17)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 遺跡番号	***	***			
どんじほいじかなみいせき 尼寺庵寺南遺跡	奈良県香芝市 尼寺2丁目 171-1,-2, 180-1,-2,-3	292109 144	34度 34分 18秒	135度 41分 57秒	20040818 20040909	62.25m ²	個人住宅 建 築
どんじほいじかなみいせき 尼寺庵寺南遺跡	奈良県香芝市 尼寺2丁目 296-1	292109 144	34度 34分 16秒	135度 41分 59秒	20040818 20040909	55m ²	範囲確認 調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
どんじほいじかなみいせき 尼寺庵寺南遺跡	寺院	飛鳥時代 奈良時代 平安時代	秦都小溝 土坑	瓦片、陶磁器片	寺院に関する遺構は検出されなかっ た。		
どんじほいじかなみいせき 尼寺庵寺南遺跡	寺院	飛鳥時代 奈良時代 平安時代	秦都小溝	瓦片	寺院に関する遺構は検出されなかっ た。		

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 18

—平成16年度—

2005(平成17)年3月31日

編集・発行 奈良県香芝市教育委員会
〒639-0292 奈良県香芝市本町1397番地
TEL. 0745-76-2001 FAX. 0745-78-9150

印 刷 堀内印刷株式会社
〒639-0292 奈良県大和高田市春日町1丁目9-10
TEL. 0745-52-0557 FAX. 0745-23-2330
